

屋敷てん

547
12月

やさしきテロリスト・村木源次郎



大杉栄らと共に明治・大正のアナキズム運動を支えた人物を多彩なエピソードで活写する

秋 あき

山 やま

清 きよし
(詩人)

労働運動社の御隠居さん

村木源次郎は大正のテロリストとしての記憶さるべき人ではなく、中浜哲や古田太次郎や河合康左右らギロチン社の人々とは比較にならぬほど早くからの、あの明治の赤旗事件以来の活動家であり、大正のアナキストとしての経歴にもふかいものがある。

大杉栄をリーダーとする「労働運動社」の存在が大正の一桁時代にわが国の労働運動に強い影響を与えていたとき、大杉の協力者の一人としてこの人の名を逸することはできない。しかし、労働者のゼネストを社会変革の手段として重要視した幸徳秋水から大杉栄に

至る路線をのみアナキズム運動の方法とするものではなかったといったところが、この人の足跡にはほの見える。いいかえれば、大正のサンジカリズムが、労働総同盟の労資協調主義と対立して花々しかった時も、その流れの中に身を置きながら、自分の生涯を懸けるべきものが労働運動そのものではないことを自覚していた人のようである。その点では仲間として生活的にも密接だった和田久太郎や近藤憲二らともすこし異っている。

その彼の思い出として近藤憲二が書いてい

る。
「暗殺の話など書くと、村木はおそろしく物騒な男だったようだが、とんでもない

い。彼ほどやさしい人なつこい、親切な男はめずらしい。ひとの面倒がる厄介なこととは、たいがいひとりで引受けてやっていた。仲間の誰かが監獄に入れられる。彼は早速あちこち歩きまわって、本や金を集めて差入れていた。これはよほど足まめでないと、できないことだ。彼はそれを自分の役目のように心得てやっていたのである。当時、仲間で監獄にはいったもので、彼の世話にならなかつたものがあるだらうか。また誰かが病氣をする。彼はすぐやっけて看護をしたり、ロハ病院を交渉にいったりした。そして行く先々のどこのおうちでも自分の家のようにして、台所の手伝いを



村木源次郎

したり、使いに出たりした。みんなも頼みよかったんだ。『御隠居』のあだ名はそういう彼の性格をまことによくあらわしている。」「(村木源次郎のこと)」「無政府主義者の回想」

労働運動社の御隠居こと村木源次郎についての右のような話は、すでに大正のアナキズム運動の回顧のなかで一個の伝説となっているが、最近読んだ『おんな二代の記』(山川菊枝)のなかにもまた、このはなしを裏書きする叙述があった。

「鎌倉へ移ったのは大みそか(注・大正五年)の日で、駅につくと、あらひ紺がすりの筒袖の着物の、短い裾から長いスネを出した大人と子供のあいのこのような人が、ニ

ニコして出迎えてくれました。色白で目の大きな、柔和な顔つきのこの青年は、村木源次郎氏。赤旗事件(注・明治四一年)でつかまった後、未成年なので一年で出て来たものの、久しく結核を病み、ようやくよくなったところでした。革命歌などをうたいながら掃除もきれいにすれば、食物ごしらえも上手、男のことで使い歩きも早く、親切な人で、子供や年寄り、病人の世話はお手のもので、誰にも親しまれ、どこでも重宝がられた人……」

「村木氏は、職も家もなく、また一生そういうものをもとうとしなかった天性の風来坊で、ゆくさきなきをわが家とし、誰でも彼に一宿一飯を惜しまず……私と同年でいながらあのつんつるてんの紺がすりの筒袖のような、十五、六歳の少年の着物でも平気で着て歩くような人でした」

「村木氏はゆくさきなきで、世話になったといっても、食べものは甲の家、寝るのは乙の家ということも珍らしくなかったようで、そのころ、大逆事件にうちもらされた同志の人々の多くは失業者で、いったい何をして生きていたか、見当のつかないよう

な生活だったのです。なかでも村木氏がその手引きで社会主義になったという先輩渡辺政太郎氏夫妻の窮状などは、どん底の苦勞になれていつも明るい様子を失わなかったさすがの村木氏でさえ、声をくもらせず話せないほどのものでした」

山川菊枝が村木氏についてこのように回想したその大正五年といえは、むしろロシア革命以前、第一次世界戦争の只中で、また神近市子氏が恋のもつれから大杉栄を刺した葉山の日蔭の茶屋事件の年である。まだアナ・ボル論争が表面化する以前であった。

ニヒルとテロル

村木にたいする近藤憲二や山川菊枝の回想は、他に幾人かの人々が村木について語ってきたものと寸分たがわぬといってもいい程の、むしろ定説といってもいいものではあるが、「革命歌などうたいながら掃除、食物ごしらえ、使い歩き、子供や年寄り、病人の世話」というところは、若い日の村木を知ろうとする者には印象のつよいことである。そうして「ツンツルテンの紺がすり……十五、六歳の少年の着物も着て歩くような人」であ

ったところに、社会変革を志とする彼自身の生き方の素朴さが見出せる。それは自分における無欲恬淡ということである。それが生来のものか、青年期以後に得た社会観と人世観によつてのものか、おそらくはその双方であろうが、大正期の若者の社会主義的献身的パターンがここにはある。あるいは「日常の生活欲望の自己における解脱即ち生涯を運動にかける生き方の矜持」といいかえることもできるだろう。かかる生き方を決定するものどこかには所謂ニヒルの心情があるのでなければならぬ。村木源次郎にたいするこのような理解と解釈は、革命運動とニヒリズムの問題を孕みつつ、テロリズムの発生を予期させる成行への透視を含んでいると私は思う。

「初期の社会主義者にはクリスチャンが多かったものであるが、この渡辺(政太郎)氏も、深尾韶氏らもみなそうで、いっしょに静岡あたりで孤児院の仕事を手つだっていたのが、一念発起し、北海道へ行って農場を開き、そこに平和な新しい村、共産主義の理想郷をきずくつもりで出かけたところ、社会主義のパンフレットを買ったために渡辺氏はつかまって初志をとげず、――

渡辺氏は万年失業者で、横浜にいたころ病弱のからだで車夫をやっていました。凍るような北風にさらされて一日中働いても、親方に車の損料を払うと、手に残る金はないも同様、夜ふけて力のない咳をしながらトボトボ帰って来る夫をまちうけた妻が、内職の針仕事の手を休めて、火鉢の螢火で食事を温め、『お帰りがおそいので私はお先にすませました』というと、『おそくまで待たせてすまなかったな。私はそとでまてきたからあんたおあがり』と答える。ふすま一重へだててそれをきく村木氏はいつも涙を抑えたといいます。妻も夫も、たがいにたべていないことを知りあっているのが、村木氏にはよくわかっていたので、『あんなに貧乏しながら、あんなに仲のいい夫婦も珍らしい。まったくいい人たちです』と村木氏はよく話しました」(「おんな二代の記」)

山川菊枝が大正期の経験と回想を綴る中でこのように書いた村木源次郎と渡辺政太郎とのかかりについては、私自身もいまふかい関心を向けている。というのは、大正期の活動的なアナキストたちについては近頃大杉栄

などはかなり語られてきている。しかしそのとき必ずその名を言われながら、その実際の姿と行動が十分に明らかになっていない人として村木源次郎がいる。またそれ以上にもはつきりしていない人として渡辺政太郎がいる。私は若い友人と協力してこの二人に関する資料の蒐集を志し、すでに『渡辺・村木資料』を二冊まで出しているが、幾人もの人から強い友情をもって語られながらその事蹟がはつきりしないのは、文章などをかくことが殆どなかったことにも原因がありそうだ。自己顯示というものがなく、運動に献身することのなかに自分の生きる喜びをひたかくしたともみえる二人のことを、まだ記憶している人が生き残っているうちにと思つて、蒐集を思い立ったのであるが、やはり意外に困難である。渡辺政太郎は、大正期に勃興したアナール・サンジカリズム運動を思うとき、大杉栄とは別個の意味で忘れ難い人であるにもかかわらず、すでに視界から没しようと思えしている。キリスト教的な教養から出たアナキストの事蹟と併せてその生涯を知りたく、またその必要は私たちがかりのものではない。私はここに村木源次郎について書こうとし

ながら重なるように渡辺政太郎への思いが湧いて来る。この二人のかかわりの中の、もっとも強烈なエピソードを語って、急ぎ本題の村木その人に移りたいと思う。

立野信之の小説『黒い花』(昭和二九、小説新潮)の冒頭に大正七年五月十七日に死んだ渡辺政太郎の葬式のときの光景が書かれている。

「人々は、すぐ困惑の中に投げこまれた。運びこまれた棺桶が座棺で、一昼夜近く仰臥させたままの遺骸が硬直しているため、棺に納らないのである。

『脚を曲げればいいんだ、脚を!』

『その脚が曲らないんだよ……』

人々は何度も試みたが、うまく行かなかった。

『弱ったな、これは……』

溜息が、人々の間から洩れた。

するとその時まで少しはなれたところに坐って見ていた村木源次郎が、無言で立ちあがると、着流し姿のままで、人々を割って入った。——村木は、近くの本郷台町に住んでいたのと、生来の世話好きから、故人が息を引取るまで看病したのである。

——オレに任せろ!

たであらう、そのような彼。この現実について復讐しかない村木が思ったとしても何処にふしぎがあろう。

極北のヒューマニズム

私が村木源次郎の名をつよく記憶にとどめた始めは、関東大震災の年の雑誌『改造』十一月号の「大杉栄追想」特集を手にした時である。私がこれを手にしたのは雑誌が出てから幾年か過ぎた、昭和になってからだだったと思う。そこには二十名ほどが大杉について書き、また他の人々が「甘粕事件」を批判し、あるいは震災時の反動的な各種の動向を問題として書いている。中でもっとも個人的に大杉栄のことを「どん底時代の彼」と題して書いた村木の追想文が私にある感動を強めた。筆の人ではなかった村木が、そこで語ったものは、神近市子に刺された葉山事件以来、落魄といってもいいほどに生活に窮した中での大杉のある行為への感動であった。前年死んだ野沢重吉(注・車輓として車界党以来社会主義運動に加わった人。大杉栄はその最初の著書『労働運動の哲学』を故人野沢重吉に献じている)の妻に、たった一枚残してあった伊藤野枝の羽

そんな気構えが、村木のやせた肩に見える。村木は無言で近よると、いきなり自分の膝頭を遺骸に押しあて、足首をつかんで力任せに折り曲げた。蒼ざめた、必死の面持ちだった。ポキッ! とにぶい音がして、脚が曲った。

人々は思わず眼をそむけた。

——何という乱暴なことを!!

だが、次の瞬間、人々は蒼ざめた村木の頬を涙がしたたり落ちるのを見た。泣いているのだ! 泣きながら、村木はもう一方の脚も折った。その間じゅう、村木は一言も発せずに、それをやってのけたのである。

これはなしを立野信之は誰かにきいたにちがいない。近藤憲二からだったかもしれない。近藤もまた『一無政府主義者の回想』のなかに、その時のことを書いている。

「渡辺の小父さんの遺骸を納棺するときであつたが、なにぶん一昼夜近くも寝かしたままにしてあつたので、骨が硬直して、小さい坐棺におさめるにはたいへんな苦心で、もてあましていた。すると村木が、おれにまかせるといわぬばかりに乗り

出してきて、まるで薪ざつ棒でもへし折るような調子で、足を膝頭にあってポンと折るのである。同志のうちでも最もながく、そして最も故人と親交のあった彼が、この手荒なことをするのである。涙を頬に伝わらせながら。私は、この涙のなかに彼の半面を見た。そしてこの行為のなかに他の半面を見た。この両面が相混合するところに彼の全貌を見るような気がした」

いい得て過不足なく、そして村木源次郎その人をこれほどに語った出来ごとめつたにあるものではない。私は小説家立野信之の描写よりも、この回想記の方にふしぎなほど迫る力を感じる。それはその時、同じ痛憤の中に在った近藤憲二の思いの激しさからであろう。この上ない貧困、親しみと尊敬をこめて今見送るべき先輩同志の遺骸に手と足をかけてへし折ることを敢えてしてのけた者の怒りは、彼の生涯に亘って消え去ることがなかったのではあるまいか。

渡辺政太郎ほどに清く貧しく、他人を優することなく生きた人の、生涯の最後の光景としてこのシーンの厳かき、それを誰もが日頃やさしい村木にふさわしくないとと思わなかつ

織を質草にして得た五円の金を余さず呉れてしまった。村木はあいた口が塞がらぬ思いだった。葉山事件後の大杉は同志と離れ、生れたばかりの赤ん坊(魔子)を抱いて野枝は産褥に在り、米を買う金もなく、しばしばふかし辛で腹を満たしていた、その中の出来ごとなのである。五円借りたら三円くらい渡して、のこりで久しぶりの米にありつけると思

って質屋からかえって来ると、大杉はそれを、「少いが、今日はこれだけ」といって残らず野沢のおばあさんに渡してしまった。

「私は一寸ばかりとしましたね。まさか皆んなは渡すまい、せめて二三日の米代は残すだろうと思っていたのでした。が、しかし私は、お婆さんを送り出している大杉の後姿を呆れたように眺めているうちに、何とも云えない気持——と云うよりは温い血潮のようなものが、何だかこう腹の底の方から湧き上って来るように感じて来ました。そして、大杉のよくやるニヤリとした

笑いが、私の顔にも現われました」

この大杉栄もさることながら、このような大杉に血肉的な信愛を感じた村木源次郎、これは、渡辺政太郎の死骸の膝骨を折ったこと

と一つである。アナキストにおける極北のヒューマニズムを私は彼らの日常の生活の中に回想して今日も襟を正す思いである。

クロボトキンを読み、バクーニンを知り、アナキズムの反権力を追究する過程にこのヒューマニズムを失っては、いったいその行く先はどこだろう。ただの合言葉になっただけでは反国家も自由連合も、現実について強力に発動することはできない。現実について否定の姿勢の中に明日を、見出す者であるためには、自己の日常の生き方の中にもまた現実世間の幾多のマイナスの介入を発見するきびしさがなくてはならぬ。相互扶助が動物や人間に社会的本能として在るのであれば、われわれは今日の機械化された社会生活の中でその回復と実践に向うものでなければならぬ。革命の後にそれがあろうというのではなく、革命の中にそれが来るのでなければならぬ。

最後のときの用意にただ一枚残しておいた錦紗の羽織は金五円也の質草となり、先輩の老妻に余さず提供された。傲岸不遜、道徳無視の悪魔と呼ばれて社会から葬られんとしてゐる者の、当然の行為として大杉はかく在っ

たのであり、だからこのヒューマニズムに村木源次郎の感銘は生涯つづいたのであろう。恵んだのでも与えたのでもなく、たまたま持っていた者と持っていなかった者とが分ちあったということではなかったそのことが、村木を感動させたのである。

この場に立ってわれわれは、近藤憲二や山川菊枝が書いた村木源次郎を思い出して見よう。当然のこととして他人の世話をし、平然として他家の人として在る。下獄者や病人の世話、誰かがなすべきことを、たまたま彼がしたただけということである。運動の表面に目立って登場するということもなく、その存在を知られていても、むしろ運動のかげの部分に属していたかのような彼であった。明治大正の主義者の一人だった村木の名を、知って注目しながら容易にその人間像を描けなかったのは、伝説化されようとしてつづある大正のアナキストの勇気果断の面影をこの人に見ようとし過ぎたためのものである。

マコとゲンニイ

昭和五、六年ごろ、私も関係した『弾道』という詩雑誌に、草野心平が小さな詩を一つ

「マコよ」と題したもの、いうまでもなく、関東大震災のとき両親を殺された数え年七歳の、大杉栄・伊藤野枝の遺児魔子のために書いたウタである。

マコよ、独りで泣くのはおよし、
僕も一緒に泣かしておくれ、
僕に、よく似た大きなお目に、
露を宿して歎歎く時は、
僕も一緒に泣かしておくれ、
僕と、ママと、が帰らぬ事を、
僕が寝床で話したをりも、
マコよ、お前は傾くばかり、
涙見せない可憐しさに、
僕は腸断つ思ひ

(以下略)

彼はこの「マコよ」をゲンニイという彼への愛称または通称によって発表している。永く大杉らと起居を共にして幼いマコも慣れ親しんだ源兄(ゲンニイ)であった。この童謡をつくったとき、遺児魔子への不憫さとともに怒りは彼の内部にはげしく潜んで、その後における行為を決意していたことである

紹介して、こういった。

夏のお日様かんかん
照らす
僕の友達ミケツと云つて
赤い煉瓦のお家の中で
独り静かに二本を読むよ
夏のお日様かんかん
照らす

僕は汗だく埃にまみれ
赤い煉瓦のお家をさして
一人よばよば二本を運ぶ
夏のお日様かんかん
照らす

(監獄通ひ)

このすばらしい傑作！この詩は吾らに分野とか技術とかを考えさせない。同時に又、それを考えさせる。こうした小曲風(分野)そしてイカツクない表現。(技術——お太陽とかなんとか言ったら、この詩程強い余インはないであろう)(『弾道』昭和六年)プロレタリア文学がさかんだった時期、詩といえはとかく元気に階級的な反抗気分を

うたい上げなければならぬもののように考えがちな頃、誰の詩ともいわず、この七五調の童謡が紹介されたのである。そして草野心平は「このすばらしい傑作」という。なるほど心安く読めるし、書かれていることもよく解り、その中身もわれわれのもので、何の誇張的形容もなく、したしみぶかく控え目なウタである。まったく、お仲間よ！なんて叫んで書くのが在り来りの方法だった季節に、このウタの幼いほどの質実さは、たどたどしく見えて、愛情にあふれている。それを幼稚に見せるほどの老成、といつては言葉として矛盾そのものだが、何かそういいたい思いを誘われるものがあつた。私はこの詩の作者が、テロリストとしてすでにこのときから数年前に獄死した村木源次郎だとはその時も知らなかった。人のため仲間のための日常的な献身を、この詩は彼の生前を知らぬ者にも納得させる。残念ながらこの詩が、いつ、どこで発表されたのであるかを現在まだ私は知らない。

村木源次郎の詩(童謡)として知られるものが三つある。一つは『改造』の大杉栄追想特集の「どん底時代の彼」の末尾に付けた

ワライガオ。
カヘラナイカト
キイタラバ、
静カデイイヨト
イヒマシタ。

(ヒサイタチャン)

う。「ほくもいっしょに泣かしておくれ」と幼い者に語りかけるとき、いっしょに泣くとは、幼子のすすり泣く涙をふくことであり、より以上に自分のやる方のない怒りを己自身に深くたしかめることである。この詩を聞いたとき村木が、後日のことを決断していたであろうと、どうしても私にはそう読めて来るのである。ゲンニイ、マコよ、と呼びかわしてきた幼い者への愛情のふかさだけ、彼の怒りがはげしかったのだ。

ついでに彼のもう一つの童謡も紹介しよう。大正十一年一月二十一日、同志久板卯之助が伊豆天城山の猫越峠というところで凍死した。岩佐作太郎、望月桂とともに村木は彼の死を見とどけて死体の始末をするために行った。そのときのウタである。

ニノヤマノオクノオクノ
オクヤマデ
ヒサイタオヂチャン
ネテイマス。
オテテラムネニ
チャントオキ、
雪ヲヒトネニ

私はこの詩のなかに村木源次郎の性根のふかいところにひそんでいるニヒリズムを見、この詩はむしろ、この上なくやさしい。こどもに語りかせるに十分な意をつくした表現でもある。しかし「雪をしとねの笑いがお」「静かでないよと、言いました」とは、やがて自分の上にも在るべく来るべきものを、凍死した同志のうつくしい顔に見つめている彼自身の思い、あるいは彼自身の決意であつたのではないか。家を成し、家族団欒の現世の幸福をまったく期待しない生活をつづける者には、期待し得るものはわが孤独の死だけである。自己の生きる命を何に賭けるかの決意、そのときそれはまだ彼において抽象的な死の覚悟のみであつた。その翌年、日本の軍部——その憲兵隊の手で大杉夫妻が殺されたとき、テロリスト村木の目標は定められたであろう。童謡「マコよ」を聞いたとき

「僕はハラワタ断つ思い」と彼はうたっている。私ははるかに付度する。父母を奪われた幼児、自分にこの上なく親しむ親無し子、それを描いて自分が決行しようとするものをはっきり見定めたときの、その断腸の思いがうたわれたのであらうと。しかし、テロリスト村木源次郎を語ることをいそいでではなく、い。ヒューマニスト村木であった故にテロリスト村木であったことを、いやテロリストたり得る者の生活のヒューマニズムと、その生き方のやさしさをまず顧みよう。

下町の若旦那

昭和三年（一九二八）という年に私は目の前で世界が廻るような経験をした。私の知人たちが踵を接してボルシェヴィズムへと転向していった。私は今もその人々の真剣さをうたがわれない。彼らは必死に自分の生き方に忠実であったと信じている。その時期、文学少年の私たちにとっては、ボルへの転向は理論的思想的には安易、しかし実践における弾圧はきびしかったと思う。その下を潜って共產主義に転向した中の一人江森盛弥が、戦後出した『詩人の生と死について』という随筆集

の中に、村木源次郎の思い出がある。

「わたしの小学校のときの、ひとりのなかのいいともだちの家が、村木の親類だった。ぬい、く、屋（絹布にしゅうをする職）をやっていたその家へ、村木はときどき姿をみせた。村木源次郎（二八九〇—一九二五）は少年時代に平民社の一員となった。一九〇八年の赤旗事件で入獄していたために、かれは大逆事件にひっかけられないですんだ。かれは大杉栄のいちばんしい同志だった」

「その『源にい』が、そのころアナキストのあいだではやっていた赤いトルコ帽に筒袖の和服といういでたちで、尾行の刑事を二人ばかりおともにつれて、「ぬい、く、屋」にやってくると、わたしはかれにあって、はなしをきいた。かれは、色の白い、おもながな顔に、澄んだ、張りのある目をしていて、職人のように、髪をみじかくかりあげていたので、なかなかいせにみえた。かれは、たいへん人なつこくて、親切だった。どもるくせがあったせい、か、ふだんは無口だったが、わたしをみると、かれは、大逆事件のはなしやバクーニンやク

ロボトキンのことなどを、熱心にはなしてくれた」（江森盛弥『詩人の生と死について』）この江森の記述は、のこっている村木源次郎の写真をもそのまま思い出させ、人となりのやさしさの一面もよく語っている。ここに出てくる「ぬい、く、屋」というのは村木源次郎の近い親戚長芝家のことである。

そのころの長芝家の当主三之助は村木源次郎の叔父であった。源次郎の祖父村木喜三郎の長男は喜太郎（源次郎の父）、その弟が長芝三之助であり、その長男長芝真一郎は江森盛弥と友人であった。

「わたしは逗子の中学校（注・開成校）に通っていた。なかのいいともだちもなんにかいた。映画俳優になった岡田時彦と江川宇礼雄、歌うたいになった徳山蓮などがそれだった。だが、かれらも、わたしの遊ぶあいてではあったが、はなしするあいてではなかった。——そのわたしにたつたひとり、はなしあいてになってくれる人がいた。——それは村木源次郎だった」

江森が村木と知りあった、その仲立ちとなつた友だちが村木の従弟長芝真一郎である。江森はその長芝の家で村木と出あって話をき

くようになった。そこは鎌倉の小町、大杉栄が、村木の叔父の三之助の斡旋で長芝家に程近い鎌倉小町に移ってきたのは大正九年の四月であった。

江森は中学校の友だちの江川宇礼雄らのことを「あそぶ相手ではあったが、はなしするあいてではなかった」ようにかいているが、私のきいた話は、そこがすこしニュアンスがちがっている。

私は長芝三之助の次男義司氏から三度くらい古い話をきいた。最初のとき、ギロチン事件の中心の一人倉地啓司に伴われて西武新宿線の新井薬師前と沼袋駅の中ほど、妙正寺川に近い同家をたずねたのは、昭和二十六年の夏だった。その年の秋に、世田谷区深沢の吉田一氏宅で、先輩アナキストたちの追悼集會があったとき、長芝氏もそこに見えていた。

私は同家ではじめて若い日のことや、ほとんど誰も知らぬ、まったくきいたこともない村木源次郎の特長ある逸話をきくことができた。それははじめてきていて、テロリスト村木源次郎にそんなことがと思ひ、しかし思ひをひそめてみれば、なるほどとうなずける話であった。三度目に同氏と逢ったのは今年の六

月はじめで、鎌倉における大杉たちのこと、また村木源次郎についてさらにほほえましい昔ばなしをいくつか聞くことができた。

村木の叔父長芝三之助の肝入りで大杉栄が鎌倉小町に住んだこと、そこに出入して注目された中学生が四、五人いた。江森盛弥と江川宇礼雄、岡田時彦、長芝真一郎らである。注目というのは世間からであり、また警察からである（その一人、岡田時彦の娘岡田茉莉子が映画「エロス+虐殺」の中で伊藤野枝を演じたのは三年ほど前であった。彼らが大杉家に話をききに行くようになったのは、むしろ村木源次郎の導きである。同じころ鎌倉に、学生ではない町の若者たちによる野球団ができて、小雀クラブと名乗っていた。スポンジボールではなく硬球を使用した。ここの投手が長芝真一郎であり、頼まれて村木がその球団の応援歌をつくった。

春八幡の花のいろ
秋玲瓏の長谷の月
夏紺碧の由井が浜
冬さんらんの星月夜

見よ弘安の功績を
きかずや右府の大覇業
天下に名高き鎌倉の

健児立ちたる野球団

フリー フリー 小雀

この歌詞に多少の聞きちがいが、書きちがいがあつたにしても、このそれほど上手ともいえない応援歌のことを思うたび、なんともいえない感慨が湧いて来る。テロリスト村木源次郎作の野球応援歌なんて、誰にも想像することとはできない。彼の同志たちだつて思いも及ばぬことだらう。応援歌をつくつたというだけではなく彼は町の若者たち、瓦屋、仕事師、仕立屋などの職人どもが集まってつくつた野球チームを愛し、はげましを送っていたというから「労働運動社の御隠居さん」といわれた村木の、これは友人たちもあまり知らなかった姿かもしれない。それは講談や落語の好きな彼の面影からはすこし飛躍して見ええる。だが「横浜の源ちゃん、鎌倉の源兄」は黒襟のかかった着物や、しほり染めの浴衣が大好きだった。そして彼は、妙に遊びに行く先き先きで、直ぐ其処の「内の

人」になつてしまふ。他の真似の出来ない、一種のやわらか味をもつていた男である。僕に変な江戸趣味のあるのも、半ばは鏡花の小説の影響ではあるが、半ばは村木のお仕込みである。最初僕を八丁堀や浅草の金車へ引っぱって行ったのも彼である。彼は、もとはクリスチャンである。——誰も知る通り彼は信仰の男であつた。クリスマス臭いところもやが残つていた。毎年クリスマスには、知人の幼い子供たちに『贈りもの』をしていた。やわらかい、やさしい村木を知っている人は多い。が、彼の『澄みきった底の火力』を知っていた人は、あるいは少なかつたかも知れない」と和田久太郎が『獄窓から』でかいてるように、村木における回顧的な人情深さとかくされたやささかのハイカラ趣味は、テロリストの心境と必ずしも矛盾するものではない。いくらかの信仰の習慣と無神論とアナキズムが彼の内部においては、やさしく同居していたものであらう。矛盾を矛盾とせず、自己内部を統一し得るのは、何を為すべきかということの自己における責任感である。

さらにまた寄席と講談落語の好きな、黒襟のかかった半纏をひっかけた長火鉢の向うに

坐つてでもいるような下町の若旦那の風情を何となく思わせながら、実際はひろい理解と好みとそれにふさわしい知識欲と探求心をひそめている、この自由の心のひろびろとしたものに、私は憧れに似た思いさえ覚える。前に紹介した三つの童話も併せて、うたをつくる好みがあり、それにふさわしい心得のあつたことが証明されるのである。私は『改造』の大杉栄特集に彼の文章を見たとき、ほとんど物を書かなかつたといわれていたが、そのことを裏切るほどの語り口とおだやかで過不足のない筆致におどろいた記憶もある。すんで物を書くことをしなかつたというだけで、やればやれた人ではなかつたか、という思いがいつまでも残る。

野球好きで物覚えのいい人ならひょっとして記憶の底に、わが国ではじめて出来た芝浦野球協会という職業チームのあつたことを知っているかもしれない。村木源次郎が応援歌をつくつた小雀クラブの投手長芝真一郎は、テストをパスしてその投手となつた。学生野球の華やかな大正十年か十一年のこと、やがてチームを解散せざるを得なかつたけれど、第一投手山本英一郎(後巨人軍)に次ぐ

第二投手として期待されたものであつた。村木がこの従弟の職業野球入りに大賛成だつたというのは、彼のかくれたエピソードというに値するだらう。

岡田時彦とか江川宇礼雄などの映画スターの卵が彼の話をきいて、鎌倉の大杉家に遊びにいっていったということに至っては、今はもうそれを知る人も語る人もないだらう。

山川菊枝の回想に出て来る村木は、紺紬の筒袖をきる子供っぽい青年だつたというが、江森盛弥の思い出には「アナキストの間ではやっていた赤いトルコ帽に筒袖の和服」となっている。赤いトルコ帽がアナキストの間の流行とはきいたこともないが、多分それはある時期大杉栄が用いていたものをちよつと失敬してかぶつたのではあるまいか。無造作でなりふりかまわぬ一面が、横浜生れのハイカラ趣味のどこかに同居していたのである。

赤旗事件のころ

村木源次郎は、明治二十三年(一八九〇)横浜の貿易商糠屋に生れた。父喜太郎の長男であつたが、戸籍面では祖父喜三郎の四男と

なっている。四歳のころ家が没落し、十三歳で写真屋の丁稚となつた。早くから父の感化をうけてクリスチャンとして横浜山下町の海岸教会に属したが、同教会にいた荒畑寒村、服部浜次らが青年修養会を組織し、やがて社会主義団体「平民結社」が生れたのは明治三十七年。村木は十五、六歳でそこに加わり、

十七歳で東京の平民社に關係した。明治四十一年(一九〇八)十八歳のときに赤旗事件に連座して懲役一年で千葉監獄にはいった。

はじめ写真屋の丁稚となつた村木は、やがて牛坂下の牛乳屋につとめた。その主人は土屋莊平、後々まで土屋家と村木は親交があり、後にギロチン社の活動に入つてから、桜木町駅よりの橋角にあつたそのミルク・ホールが彼らのポストを代行していたこともあり、ながく横浜における村木の晴ともなつていた。身を惜しまず働く村木の得た信頼のふかさということであらうか。明治三十年代、

横浜の平民結社は東京の平民新聞に呼応して集会、演説会などを開いた。明治三十七年十一月二十七日に社会主義演説会を伊勢佐木町の相生座に開催したときは来会者が三百名を越えた。それまでの会場にはいつも巡査が二

名か三名来たくらいだったが、そのときは署長以下二十余名のほか私服刑事をも動員した。翌三十八年早々に平民結社は解散に追いこまれ、「警察の干渉により平民結社は芽出たてに解散した、ケレド我等は決して凹みません、かえつて決心を固くしました。▽斯くて我等は『あけぼの会』の名の下に再び団結しました、『あけぼの会』? 何と其の名の美しく希望あるよ、現在会員は十九名——」という記事を『直言』の同年一月八日(第六一号)紙上に見ることとなつた。曙会はさらに消費組合の準備をすすめたり、演説会を開いたりした。村木はずっとその会員であつたが、われわれが彼の名をはじめて見るのは赤旗事件からである。

『熊本評論』(社会主義資料集第2冊)に彼にかかわる三つの記事がある。

A、四十一年七月五日

官権との大衝突——評論社諸君、昨六月十九日、我等同志は上野の停車場付近に於て又もや官権との大衝突を起しました。——少時警官と小ぜり合のあつた後大杉と百瀬と此頃横浜から来て居る村木と云ふ男の三人が交番の中に跳り込んだ。——東京、三木

生報

B、四十一年八月二十日

赤旗事件公判筆記 村木君に對し同様の訊問をなす、同君は簡単に其の通りなりと答ふ、裁判長は更に、裁「被告は旗の製作に關係せしや」村「關係せず」裁「被告は無政府主義なるか」村「キリスト教社会主義を以て任ぜしも入獄後無政府主義に傾き来れり」裁「革命の歌を歌ひ万歳を叫びしか」村「万歳を叫ばず、然し革命の歌は唱へたり」

村木源次郎君「余は商業学校の前にて、大杉君の旗をつかみ、大杉君に助力せしが、同君の放せし後、互に旗を奪ひ合ふ中に警官数名に依て捕へられ神田警察に送られ其後旗の如何に成りしかは之を知らず」

C、四十一年九月五日

『熊本評論』あて村木の書簡

輕輩浅学何等のなす如く爰に至り、却つて諸兄より多大の慰問に預り感涙に不堪、幸に入監来身想共に健々たり、再び大風飛揚の日を、ひたすら屈指して望みつつあり、八月三十日

(注・この三つの記事のうち、A、六月十九日、

の事件は山口孤剣の出獄を上野駅に迎えたときのこと、赤旗事件はその日から三日後であった。また、Cの村木の書簡の日付は赤旗事件判決の翌日に当たっている。

明治四十一年八月二十九日、東京地裁による赤旗事件の判決主文中、村木源次郎にかかわるものは次のごとくであった。

被告と、晋、源次郎及悟ヲ各重禁錮老年ニ処シ罰金拾円ヲ附加ス

（この、さとは大須賀さと（学生、晋は百瀬晋（新聞記者、源次郎は村木源次郎（亜鉛工業所事務員）、悟は佐藤悟（無業）であった。）

一ヶ年の刑を終って村木がかえってきたのは明治四十二年八月二十九日、百瀬晋といっしよだった。『社会主義者沿革・中』（ガリ版、局）にそのときが次のように記述されている。

「神田錦輝館暴動ニ依リ処刑セラレタル百瀬晋、村木源次郎ハ千葉監獄ニ於テ服役中ナリシカ明治四十二年八月二十九日満期出獄シ兩名トモ同日着京幸徳伝次郎方ニ到着ノ上村木ハ即日出發横浜ノ実家へ帰リ（爾来親族父兄ノ注意ヲ受ケテ主義者トノ交際ヲ避ケ専心業務ニ従事シ稍改悛の情アリト

獄中のドイツ語

村木源次郎にたいして「主義者との交際を避けて改悛の情あり」との報告が為された時、監視者はこの若い、未成年の出獄者を見損っていた。また見損うだけの理由もあつた。一般には、刑余の者を家族親族の者たち

云フ）百瀬ハ其儘東京ニ住居ヲ定メタリ兩名ノ出獄ニ際シ福田竹三郎ハ出迎トシテ彼等ノ親族ト共ニ前日ヨリ千葉町ニ赴キ（此ノ出迎ハ兩名ガ予定ノ時刻ヨリ早ク出獄セシ為目的ヲ達セスシテ立帰レリ）兩名ノ東京ニ到着スルヤ其出迎居リシ新村忠雄、竹内善明、戸恒関三、堀「ヤス」及ヒ、加山助男、松崎源吉、谷田徳三、石川三四郎等ト共ニ幸徳方ニ赴キ前記ノ福田竹三郎モ亦来リ会シ談笑ノ間ニ昼食ヲ為シテ一同ハ村木ヲ停車場マデ見送りタル上各自退散セリ」この様に出獄者にたいする監視は中々にきびしかった。西園寺内閣に代った軍閥首相桂と権力者山県との意を受けた平沼検事総長その他の弾圧姿勢が国家権力を背負って発動をばげしきんとしていた。明治大逆事件勃発の一年前であった。

「一年間の獄中でドイツ語を勉強して、読むだけはやっと読めるようになった。運動する者は少しでも早く外国のことを知ることが大切だ。君たちも、将来何をするとしてもとにかく何か一つだけは外国語をモノにせよ」としづかな口調で彼はそういったのである。村木の従弟の長芝義司氏は、まったく同じ回想を、この話について二度もしてくれた。村木源次郎とドイツ語、彼の同志も友人も、誰ひとりとして彼にその勉強があつたなどと語つた人もない。

はじめこの話をきいたとき、まだ元気だった近藤憲二にすぐきいてみた。「村木源次郎とドイツ語」の真实性について。むろん私はあれこれ聞いて知っているその人柄によつて、この思いもかけぬ話を疑わなかったのであつたが、私の間にたいして返ってきたのは、「それは意外なこと、もっとも知らなかった」というものであつた。

まして彼自身そのことを口にしたこともなかったというのである。かくれた勉強家であつたこと、自分について語らなかつたこと、そのことにこれほどに徹底した人も珍しい。彼が叔父の家に帰ってから従弟たちに、獄

中独学のことを語つたのは、「外国語がこれから必要だ」という自家の経験からであつて、それは再び、社会運動に入るといふ意志をかくさなかつたことである。つまり、警察の監視と報告は、叔父一家の彼への親愛とその中に安住して見える彼の日常によつて、常識的に「稍改悛の情あり」との判断を下し、それが誤つたのである。千葉監獄の一ヶ年を挟んで赤旗事件の前と後に、社会主義運動に挺身せんとする彼の意志には動揺がまるでなかつたのである。

大杉と村木

村木には多少の逸話がある。表面に立っての活動ということが目立たず、身体が弱かつたということもあるが、何よりも自己を必要以上に押出すところがなく、ほとんど筆の仕事をせず、だから私たちはたまに彼が書いて残したものと、人々の回想の中に現われるいくつかの逸話で、彼のその後を歩いた道と、彼の生き方を思い見ることだけが可能である。

大杉、野枝、和田久、近藤憲二らのアナキストたちと形影相伴うといった姿がまず浮か

はこころよく受け入れられないものである。しかし出獄して村木が身を寄せた叔父長芝三之助一家はあたたかく彼を迎えた。三之助は源次郎の人となりを信じ、自家の者たちに源次郎の性格と資質を賞揚していたという。出獄後の彼が「爾来親族父兄の注意を受けて主義者との交際を避け」るかに見えたとしても、それは監視者の思惑とはずいぶん距つたものでなければならぬ。彼にはそんな改悛の心などさらさら有りはしなかつた。出獄してすぐの村木について、以下の話をきいたとき私は驚歎をかくしきれなかつた。深謀遠慮などというものでもなく、執拗な反抗心といつてもびつたりしない。自分の思いと行為に惑うことのない、しかもまだ未成年者という若さで自己の行く道を定めた人の確信というべきものであつたのだろうか。それはまた、永年苦業を分かちあつた同志にも気づかせなかつたほどのひそかな実行に裏打されていた。

私はこの話を二度きいた。一度は昭和二十六年夏に、二度目は今年、昭和四十七年六月にである。村木源次郎が出獄して叔父の家に來てからのある日、彼は年少の従弟たちに述懐してこういう意味のことをいったという。

んでくる。しかし彼は必ずしも大杉の思考と行動の背後に埋没した弱い個性ではなかつた。しかし赤旗事件、大逆事件に彩られた明治末から大正の匆忙期に、もっとも大杉に親近し、その活動も大杉の動向にしたがうものであつたことは、僅かな内務省や検察側の記録にも現われている。いわゆる冬の時代、東京在住の社会主義者が殆ど窒息状態の下に売文社などに倚つてやっと食いつないでいた時期から、ようやく大杉・荒畑の『近代思想』の刊行とサンジカリズム研究会によつて呼吸をはじめた時期、村木が、どんな生き方、あるいは活動をしていたかは、すでに探るに手がかりもないくらいである。『近代思想』『月刊・平民新聞』第二次『近代思想』に至る時期、大正元年から大正四年の、大杉の焦るような反抗的活動の時期にはほとんど村木の名は表面にない。しかし何らかの連携と協力があつたであろうことは、大杉の苦闘時代における大正五年の調査書（大杉栄の調査書「社会主義者人物研究資料」に、荒川義英、百瀬晋、五十里幸太郎、吉川守園、渡辺政太郎とともにしばしばその名が記載されていることからも察せられる。当時はようやくアナキ

「今日は一月二十四日だ。僕等の運動の第一頁に、ドス黒い血を刻した、その記念日だ。村木がその同じ一月二十四日に獄死したことは、因縁などという、笑うべきたわ言のあるが為ではない。素より、これは単なる暗合である。が、しかし、僕はその偶然

動」同人の写真に高津正道や近藤栄蔵がいて村木源次郎の見えないことを不審に思った記憶がある。大杉が共同戦線を取止めたとき、こたわりもなく村木は第三次『労働運動』に参加している。ボルシェヴィキとの共同戦線に反対した高尾や吉田はその後入獄してボルシェヴィキに与したが、村木は再び大杉にもっとも近い同志として協力した。

秋の蝶

村木源次郎の目ざしたアナキズム運動をどう理解すべきか、私にはまだそれを十分には言えない。労働運動における直接行動のみをもつて足れりとするものでなかったことは、大杉在世の時から、彼を目ざして同志らの認めるところだったようである。和田久太郎は村木の死後、獄中でこんな思い出を書いてい

「今日は一月二十四日だ。僕等の運動の第一頁に、ドス黒い血を刻した、その記念日だ。村木がその同じ一月二十四日に獄死したことは、因縁などという、笑うべきたわ言のあるが為ではない。素より、これは単なる暗合である。が、しかし、僕はその偶然

ズム系の大杉とマルクス主義的な堺・山川との関係が潤滑を欠きつつあり、永年の僚友荒畑もまた大杉と疎遠になりゆかんと傾向を現わしはじめた時期でもあった。大正五年十一月六日には葉山で神近市子による大杉刺殺未遂事件が起った。いわゆる恋の寝刃というべきものであったが、世論は大杉らの自由奔放な恋愛行為を許さず、宮島資夫をはじめとする大杉の同志らも、また荒畑寒村すらも、この事件を世論と同じ旧道徳的感覚から容認せず、大杉と伊藤野枝は孤立無援の中に置かれた。ただ一人村木源次郎のみが困窮の生活を共にしつつ、やがて大正のアナルコ・サンジカリズムの展開の礎石の一つとなった、といわば言えそうな彼の存在であった。大杉はこのとき同志たちに見棄てられた。結合の前の分離、というにはハプニングに過ぎるかもしれぬが、明治以来の同志のインテリゲンチヤ的な、あるいは道徳主義的な気風の彼らと離れて労働者の中に同志を求めるべき機運を得たのであり、赤旗事件前後からの仲間としては村木ただひとりであった。その村木がそこに至った心情として語ったのが、前に紹介した「どん底時代の彼」を語ったあの一文で

あろう。しかし、大正期の大杉の活動に批判なく同調する村木ではなかった。社会運動の始と終は人間にたいする愛、われと人とを区別なく共に生きねばならぬという姿勢を示す大杉には血肉的な協力を惜しまなかったが、いつも彼の活動なら何でも同調するばかりではなかったところに、わが国の社会主義運動における彼の、清冽な気骨がある。

大正六年、七年、八年としいに大杉は労働者の間に支持者を得て、そのサンジカリズムは都市労働者の間に浸潤し、労資協調を目ざして日本の労働運動をコントロールしつつあった総同盟と対立するまでに至り、その総同盟の内部にまで影響は及びつつあった。大正九年の官営八幡製鉄所二万人の大会議もサンジカリズムの影響下に勃発したものである。世界大戦後の情況もあり、また大杉を中心とする指導的なアナキストの存在も力強かった。村木が大杉家に同居して「労働運動社の御隠居さん」と呼ばれたというのはこの時期である。彼は、大正の労働運動の第一線に立つ人でも、それをもって已に足れりとする人でもなかった。

は、総同盟と対立するだけの力を自由連合主義の労働組合が掴んだときである。渡辺政太郎の死後、彼の家で研究会をつづけていた印刷工と大杉、和田、久板に指導されつつあった他の急進的な労働者が合体して北風会（北風は渡辺政太郎の筆名）となったとき以降である。大正九年大杉は上海の極東社会主義会議に潜行したが、帰国して彼は『労働運動』（第二次）をはじめた。このときの方針アナ・ボル共同戦線に敢然反対した一人が、大杉のもっとも深い同志と目された村木源次郎であった。ロシア革命にたいする遠交近攻的な思想と日本の労働組合運動が総同盟に席巻されて革命的気力を失うことの惧れとが大杉をして敢えて共同戦線に踏み切らせたのだと考えられるとしても、結果を待たずともなくこれは失敗であった。このとき共同戦線に反対した者に高尾平兵衛、吉田一があり、またこれ組にして彼等の新聞『労働者』の刊行に協力したのは宮島資夫らであった。このとき村木と久板卯之助という大杉昵懇の二人がこれを援けたと伝えられる事態はやや異常に見えるが、運動は義理人情ではないのだから、それも当然のことである。私は第二次『労働運

淋しく笑って見せた。で振り向いてみると貧弱な一枚の短冊がそこに貼り付けてあった。

淋しさや秋の水追ふ蝶一つと細い字で書いて、下に『源』としてあった」（『黙窓から』）

和田の回想は、まだ大杉が活動していた時期に、いっしょに生活しながら村木が自己に何を課していたかを語るものであり、大杉の死後、時移っても直接の目標は一つ、狙いはいつも同じさ、といっているようである。近藤憲二もまたこんなことを書いています。

「君の留守中にひとつ仕事を思いついてね……」

彼はこういって、まるで商売の話でもするような調子で話した。愉快そうな元氣な声で――。

「僕はこのとおりのからだだ、とても諸君といっしょにかけずりまわることにはできない。しかし、この俺にだってできることはある。君のいないとき、ひと仕事考えたんだ。」

つい先日ピストルの弾丸を見た。それとこの話の間には関連があるにちがいない。

私にも、見当はついた。——私は無遠慮にきり出した。

『で相手は誰だ?』

『原敬だよ』 (一無政府主義者の回想)

文章をかくでもなく、かといって集会に出て演説することもなく、労働運動社にころろしているばかりの村木を、大杉栄が「彼には彼の仕事がある」といつていたと伝えられること、和田、近藤らの友人たちが、肺患で永くは生きないであろう村木が己に託するものを暗黙に理解していたこと、いうまでもなくそれは、近藤がかいて「原敬だよ」といったという言葉の通り、村木が、大正中期の頃、すでにただ独りテロリズムを目ざしていたというのである。それも単独に決行することを当然とするものようであった。

緊張した生き死に

和田久太郎と久板卯之助の二人が『労働新聞』を企画し、これに大杉が協力してその第一号が出たのは大正七年五月であった。村木はその時、彼らに協力してその新聞をかくしたり、配布したりしたことがある。それらの協力は彼として当然のものだったのである。

「——第一号ヲ発行セリ、コレカ目的ハ同志間ニ配布スルニアラス主トシテ下級労働者ニ無代配布ヲ為スニアリ、和田久太郎、久板卯之助、村木源次郎等ニ於テ本所深川方面並ニ近隣ノ各工場ニ小數宛配布ヲ試ミ——」(大杉栄の経歴及言動調査書)とあることなど、そのことを語っている。そしてまた同調査書は「大正七年十一月警視庁報」からとして次のように記している。

同志(注・大杉の同志)村木源次郎へ宿病肺患次第ニ昂進シ到底余命ヲ保ツコト覚束ナシト医師ヨリ宣告サレタル為危険ナル行動ニ出テ以テ死後ヲ飾ラント放言シ居リシカ其後一時減退シ歩行モ差支ナキニ至リタル為大正七年十月初旬同志ヨリ見舞金ヲ受ケ転地療養ヲ試ミムトセシカ之ヲ中止シ本人(注・大杉栄)ト来住シ居レリ本人ハ村木ニ対シ其余命長カラサルヘキヲ諷シ人生疊ノ上ニテ死スヘカラスト暗ニ危険ノ行動ニ出ツヘク煽動セリトノ聞込ミアルノミナラス村木ニ対シ近來特ニ懇切ヲ尽シ村木ニ対スル見舞金贈出ヲ斡旋シ大石七分ヨリ金五十円ヲ送り林俊衛モ相当ノ見舞金ヲ送リタリト云フ」

このように村木は友人同志からと、また敵からも、テロリストとして見守られ、監視されていた。それは期待であると同時に危惧でもあり、また宿命のように見る人さえないかもしれない。そのテロリスト村木の人となりのやさしさは彼を知るほどの人が今も語りぐさとしている。大杉、伊藤といっしょにまったく残酷の証述のように殺された当時七歳の橋宗一の母(大杉の妹あやめ)が「甘粕事件以後」(婦人公論)と題して書いたものがある。

「忘れもしません、大正十三年九月三日の朝のことです。その頃私はアメリカのボートランドにいたのですが、いつものように台所を片づけ終ってから窓ぎわの椅子によって新聞を開きました。——日本からの特電で、あの福田大將狙撃事件のことが載っているではありませんか。和田さんの名が出ています。『どうとう爆発してしまっただ!』私もいっしょに、ながい間こらえていた怒りが心臓の中に湧き上って来るのを覚えました。——それは、私の心の底にあった爆発であったような気がしました。只もうじつとしていられなくなったのです。」

私はどんなにも日本からのくわしい手紙を待ちました。

兄の同志からの手紙は一月月たってもつきませんでした。その筈です。私の知っていた人達は和田さんの事件で一人のこらず警視庁につかまっていたのです。

二ヶ月もしたころに、やっと労働運動社からの手紙がきました。そして今度の事件に関係して村木さんが挙げられたことを知りました。

村木さんは、本当にやさしい人で、一口にいうと苦勞人といった人でした。ながい間兄達といっしょにくらして、兄達も他の同志たちにも増して親身な交際でした。私も『源兄』として格別の親しみを持って

いました。その村木さんが福田大將狙撃事件に関係があったというのです。私はすっかり驚きました。尤も後できくと、これは世間に全く知られていないことですが、村木さんはかつて原首相の暗殺を計画してつけ狙ったことがあるのですが——村木さんの、その物やさしさの底には、侵すことのできない或るものがありました。あの温い感情でうるむ眼! しかも一種の光りを帯びた眼! それは村木さんの一切を物語るものだったのでしょ。しかしそれよりもさらに、私は村木さんの弱からだを思いました。弱いからだの牢獄生活を思いました。あるいは再びお目にかかれないうらうという、怖ろしい、そしてかなしい予感が、幾度も私の心をかすめて通りました。

やがてこの予感は事実となって現われました。一月二十四日に市ヶ谷の獄舎でなくなられてしまったのです。大杉あやめはこのように書いて、市ヶ谷の未決監から和田久太郎がアメリカに居た彼女にはるる書いてよこした手紙を紹介し、そこに和田は、村木の最後のときのことに触れて語っている。

「村木はあのからだですから、つかまつたら駄目と思っていました。それにしても、せめて法廷にだけは起たしてやりたかったです。が、何んとも仕方ありませんでした。しかし村木は村木らしく死にました。僕が思わず枕頭に涙を流したのを見て彼は『泣い……た……た……し、し……あ、あるか』と、切れぎれな言葉で僕を

名著出版社

▼予約募集▼

地方史家・郷土研究者のための復刻地誌 岩手県史

全12巻
A5・四〇〇頁・特上製
一時私特価七万二千円

静岡県史

全3巻
静岡県編/A5・二六〇〇頁
発売中/抽特価一万五千円

愛媛県誌稿

全2巻
愛媛県編/A5・約一五〇〇頁
11月刊行/抽特価一万二千円

▼既刊▼在庫僅少▼

滋賀県史

全5巻
滋賀県編/A5・約三〇〇〇頁
別録付図上製本/抽特価二万五千円

島根県史

全8巻
島根県編/A5・七〇五〇頁
抽定価三万六千円

和歌山県誌

全3巻
和歌山県編/A5・二二〇〇頁
上製本/抽定価一万五千円

香川叢書

全3巻
香川県編/A5・二二〇〇頁
上製/抽定価一万六千五百円

福岡県史資料

全13巻
福岡県編/A5・各八〇〇頁
既刊九冊/各特価四千五百円

*各内容見本送呈

〒113 東京都文京区本郷5-15-3
電話03(815)1270 振替東京107944

叱りました。そしてすでに意識を失った死体同然の体を、タンカに乗せられて監獄を出て行きました。それは一月半ばの、風のはげしい、寒い闇の夜でした」

大杉あやめと和田久太郎の二つの手紙は、大杉夫妻死後の村木源次郎の緊張した生き死にの現実を、これ以上はないほどの親しきで語り、そのヒューマニズムとテロリストの面影をとらえていて、私などの筆で書き加えるものはない。そして私は、村木源次郎におけるテロリズムとは何であったかを、いますこし考えてみたい。

独立自主の「我」

すでに書いたことであるが、大正期のサンジカリズムの指標であった「労働運動社」の大杉栄、和田久太郎、近藤憲二らの活動に村木はずっと同調し協力を惜しむものではなかった。しかし彼は、労働運動そのものにかかわったのではなかった。彼としてもっとも気安く、自由に起居を共にし得る雰囲気が大杉とその周辺にあり、それはまた大杉とともに行動してきた彼がそこに加わることによって、いっそう、家族的コミュニティの気風が醸成

された。働く者があり、応援に飛びまわる者があり、新聞をつくる仕事があり、家があり、子供があり、そして経済的には財布を一つにして自由に必要に応じて取るという生活であった。村木はその隠居さんだった。家庭的な役廻りをおそらく誰よりも引受けてイヤな顔を見せないばかりか、その役廻りを外にひろげて監獄への差入をしたり、病人の面倒を見たり、血気盛りの主義者たちにとって必ずしも有難くはない仕事を、わが赤旗事件のとき十八歳として大正の中頃には仕事と心得ていたかのようなのである。ようやく三十歳、悟ります年輪ではない。だがそのような偉が彼にただようのは何故か。私のやや独断的な理解は、アナキスト村木源次郎の、わが社会運動にたいする身の置き方にそれはかわわっていたのだということである。

彼はアナキズムについて必ずしも大杉の弟子ではない。近藤憲二や和田久太郎があるいはそうであったとしても、村木はそうではない。一体、年月をはなれていまは跡形もないような大正の、いわゆる大杉一派の活動を回想するとき、大杉栄と彼をとりまく人々との関係は、せいぜい先輩と後輩といったもので

しかない。「レーニン曰く」が金科玉条たるボルシェヴィキとはまったく心意気がちがっている。それぞれに独立自主の「我」において、生きて活動することの責任を背負う。大正昭和の印刷工として正進会以来の闘士綿引邦農夫が今も後進に向けて力説するところ、大正のアナキスの労働運動は大杉の指導によって展開したというよりも、働く者の目ざめと前進の方向が大杉栄に近づく所があった、ということである。労働者の会合に出て、運動そのものに大杉が指導的に発言する、というものはなかった、というのである。弾圧に対する姿勢としてもそうあるべきであり、また指示と支配の重要な質のちがいがここに語られている。

村木源次郎が、労働社グループの重要メンバーでありながら、アナ・ボル共同戦線に組しなかったり、ひとりテロリストとしての心情をもちつづけたたり、また周囲がその彼の在り方を容認していたその「自由」の中にアナキズムが生きていたのである。個人的親愛においてももっともふかく、しかも戦略戦術において相容れぬことを表面化してはばからぬ、いわばそのことは大杉栄という稀な革命的人

格の存在ともかわるが、己を持することのぎりぎりにおいては譲るところのなかった村木源次郎も見事という他はない。

赤旗事件当時、彼らの師表は幸徳秋水であり、その直接行動論であった。まったく非法な手段によって合法をよそおいつつ、同志の代表として幸徳らが処刑されたあの明治大逆事件の悲憤を村木は生涯忘れることがなかった。大正七年四月の「ロシア革命記念」

の、集会のとき、立上った村木は幸徳事件に言及しようとしながら感激して話がろくに出来なかった。みんなもシーンとしてしまったとき、そのとき高島素之が高笑いしたという話が伝わっている。この村木を高島が、幼稚な感激、と見たのであればそれは知らざる者であった。これなくして革命に自己を賭け

ることが出来ようか。村木はオルガナイザーでなく、煽動者でもなかった。自分の出来ることをやるという信念とその自覚に生きた人である。彼は幸徳秋水を敬慕することの連続として大杉栄に私淑したともいえるだろう。それは人格識見の問題であって、革命の行爲としては追隨するのみであることを約束しな

い。病中の村木が、「秋の水追う蝶一つ」の短冊を指して示した心境は、死をかけるという思いの以心伝心であった。幸徳秋水の直接行動論は発展的に大杉栄に引きつがれて実現化して勢力となったが、殺された幸徳事件処刑者の思いはそこでは償われない。目には目を、の思いをヒューマニスト村木がテロリストたることによって、わが生き甲斐としたとし

明治維新史研究の重要史料誌完全復刻

史談会速記録

明治25年9月創刊／昭和13年4月まで

全45巻

幕末から維新にかけての激動期を實際に体験した古老の実歴談や旧藩史料研究の史談等を収録した、通史の裏面に埋もれんとする息吹蘇える論議。既刊15巻／各巻五〇〇〇円

武蔵野

鳥居龍蔵編集・考古民俗研究誌
考古・民俗・歴史・地誌・宗教・文学に亘り武蔵野の生き様を足で探り目で確めた論議。大正7年11月昭和18年末刊迄を復刻／既刊15巻／各巻平均五〇〇〇円

原書房

内容見本呈送
東京新宿花園町106・354-0685

その日を独り期しつづ病弱をかこった村木源次郎であった。

悲痛な悔恨

関東大震災は、八方に支配権力が民衆を煽動して白色テロルを敢行した。それは日本帝國主義が、どんなに合併と称して支配してきた朝鮮（人）をおそれ、また労資の必然の対立の中に民衆を怖れたか、そのことを告白するものであった。大杉栄らが暗殺されたとき、村木が和田久太郎と何を黙契したか、それは彼等の、それからの短かった生涯が鮮明に綴りのこした。さきの和田から大杉あやめに宛てた手紙の中にはこんなことも書かれていた。

「宗ちゃんを灰にして、皆で淀橋の家から駒込片町へ引取って間もなくでした。伊勢の津で田中勇之進という人が甘粕の弟をやりにそなうて捕まったという新聞記事を見ながら皆で話しあった事がありましたね。その時僕が『フン見ている、今にもつといるんな事が起るぞ』と独り言のように云ったのをあなたは覚えていますか。きつと覚えていられるでしょう。あの時あなたは不

安な顔つきでじつと僕達を見つめて居られたようですから。その後あなたは私たちに『無茶はして下さいますな』とよく云われまして。……しかし、あんな暴虐にたいして、又それを×××裁判でごまかしてしまつた軍閥のやつ共に対して、どうして我々が黙って復讐、せすにいられましょう。——」

ここにはじめて復讐という言葉が出てきた。村木源次郎と和田久太郎は、先輩で無二の同志大杉の虐殺にたいして復讐を誓つたのである。このことは村木が生涯をかけ政府首脳者に加えんとして来たテロルの目的とはあまりにちがひ過ぎて見えるかもしれないが、幾度かの失敗、わが身命の病弱、そして大杉虐殺へのはげしい怒り、それらの理由が彼を急がせたのである。そして武器のことから當時存在していた中浜哲、古田大次郎らのギロチン社との共闘の構えがとられたようである。もし大杉の復讐として当時の戒厳司令官陸軍大将福田雅太郎を殲滅することが出来た後には、ギロチン社の活動に参加する約束であつたともいう。しかし、すでにテロルの行使において未発の失敗を嘗めてきている村木が、復讐に成功した後、中浜らの活動に協力する

事が出来るとまでは考えなかったであろう。ただ「人間なんて、いつ、どこで死んだって同じことだ」といつづけた村木として、もし復讐成功後に余命があらば、何を惜しまんというほどの思いだつたであらう。

和田久太郎と村木源次郎は、関東大震災の一年目、大正十三年九月一日の夕刻、本郷菊坂の長泉寺に震災記念の講演に来る福田雅太郎を挾撃する態勢をととのえて待った。福田の講演のことを新聞の予告で見て、その日のその時間をたしかめるために、暗黙に新聞社関係の友人をわずらわして、それらの協力の下に、万全の姿勢がとられた。長泉寺に至る二つの道、本郷三丁目と燕楽軒の方から来る道には和田がピストルと爆弾を用意して待ち、万一にも春日町方面からの場合はそれを見て通報するため古田大次郎が立ち、村木はピストルを懐に、二個の爆弾を入れたバスケットを提げて、浴衣がけの肌に団扇の風を入れたながら、逸早く聴衆にまじって演壇の前にいた。そしてその最後の機会に和田が失敗した。燕楽軒の角で自動車を下りた福田に近づいて外套の背に押しつけて放ったピストルが空弾であつたという。ピストルの機械的操作

の錯誤であつて、和田の勇気や動作の誤りではなかつたというが。和田はその場で捕えられ、暴漢出現、福田安全のうわさが演説会場に伝えられた。村木は何事もなかつたように、バスケットを提げて、東京市外荏原町蛇窪のかくれ家に引揚げた。

和田がわずかな手ちがいから逸した福田を、残った村木はなお狙いつづけていた。それは村木がその日から十日後の夜半に隠れ家で捕えられたとき、「十六日まで待つのではなかつた」と洩した言葉によく現われている。和田が失敗した日のことを、二人の復讐をたすけていた古田大次郎は『死刑囚の思い出』に、こう書いている。

「僕は長い間、餌差町に突立っていた。和田君のつかまつたうわさは、少時して僕の

耳にも入った。残念に思ったが仕方がない。すぐ蛇窪の家に引き上げた。帰つてみると僕より先に村木君がやつて来ていた。村木君も大変残念がついてたが、さのみぐちも言わなかつた。二人は、村木君の買つて来た梨を食ひながら種々話した。梨を食つてしまつと、村木君は僕を誘つてそば屋に出かけた。——その晩のうちに、号外で福田の怪我の軽かつたことや和田君の捕まつたことなど知つたが、翌朝の新聞で更にその事についてくわしい報道を得た。

——中一日おいた三日の晩のことだ。僕は和田君の復讐を思い立った。そして村木君とも相談して、和田君を逮捕した本郷本富士警察に爆弾を投じてやる事にした。和田君は二日の夕刻に、この警察から市ヶ谷

に送られてしまつていた。大勢の刑事に囲まれて、囚人自動車にのり込もうとしている和田君の写真を新聞で見た時、二人はもうじつとしていることが出来なくなつたのだ。

——本富士署をしくじつたので、今度は福田の家に爆弾の小包を送ることにした。「爆弾小包で福田の生命が取れようとは、思いもしなかつた。要するに只おどかしだ。——罪なようだが、この位の残忍な復讐は、たしかに僕たちに許されていると思つたのだ。しかし本郷の第二陣は、十六日に村木君がやるはずだつた」

テロリストの信条は、暴には暴もて、である。民衆と同志や先輩が、苦しめられ、弾圧され、殺されて来たことに對する怒りの復讐

自費出版案内

社史・団体史・市町村史・校史・伝記
小説集・隨筆集・詩集・歌集・句集
旅行記・回顧録・遺稿集・追悼文集
論文集・研究報告書・営業報告書
機関誌・PR誌・カタログ・etc

企画・編集・割付・装釘・校正・印刷・資材・製本・製函・運搬等の印刷物製作過程のわずらわしい交渉や手間を小社が肩代りさせていただきます。御相談ください。

〈東京都千代田区丸の内九ビル5階 電話20111121〉
株式会社 中央公論事業出版

である。先陣の和田を捕えられた村木源次郎の心境は今や発動せざるは止まぬものであった。むろん一つは大杉暗殺の復讐という最初からのもの、古田が「第二陣は十六日に村木君が……」とかいている通りである。村木たちは福田にたいして前にその自邸に飛込んでの襲撃を考えたことがあり、その周辺の地形などについては調査十分であった。福田が自邸に在ることの確かな時をとらえて、その敢行を予定していたらしい。そして九月十六日をその日と定めたのは、大杉の死の日、というわずかな感傷だったかもしれない。九月十日の深夜に捕えられたとき、「待つのではなかった」と村木が口惜しがったのは、その感傷についての自嘲であっただろう。同時にそれはまた、村木の最後のテロルが復讐に重く傾くものだったことをはっきり語っていると思う。

村木はもう一方で、古田大次郎や倉地啓司らが実行せんとしていた破壊的な爆発行為に加担しつつあった。爆発のテストとして銀座や鶴見駅あたりで実験して、恐怖を与えつつあったが、自分らもまた包囲の中に躊躇せざるを得ない境遇に追いつめられており、どち

らが先に発動するかの危機に來ていた。

「十六日に村木君が福田の家に出かけるし、そして村木君はその場で死ぬか、捕まるか、二度と僕のところに帰れぬ覚悟でいた」

古田大次郎がはつきりとこう回想していたような覚悟の中で数日間を延引したのは、ただその十六日というものにこだわっただけのためらしい。だからそれが「待つのではなかった」という悲痛な悔恨となったのである。

村木源次郎と古田大次郎が隠れ家にとらえられたのは、和田の失敗からちょうど十日目の、九月十日夜であった。電報のカラ声で古田がまず捕えられ、どつと踏込んで来た警官十数名に、村木はピストルを向け、そしてしずかにその手をおろした。

彼らの復讐の企図はかくて失敗したが、もしテロルが恐怖を敵に与える目的であり、人命の殺傷を第二とするものであるならば、村木の報復の企ては失敗と敗北に彩られただけのものではない。

獄中に最後の命が迫り、労運社の同志のもとに瀕死の姿で運び出されんとして最後の別離の涙を和田が落したとき、わずかにその

口からこぼれた「泣いたって、しよがあるか」という言葉ほど、村木源次郎の生き方を焼きつけたものはない。それは、やるだけやったじゃないかという意味にもとれる。成功したってどうせ最後はこうなんだよ、という意味にもとれる。命をかけて、失敗したって、今さら「しよがあるか」である。ここに至ってこれをニヒリズムというなら、彼らも肯定するであらう。

私は今年六月のある日鎌倉市小町の大覚寺に村木源次郎の墓をたずねた。その「長芝家の墓」という文字の彫られた石塔の下に彼の骨は置かれてあるという。村木の理解者で叔父の長芝三之助夫妻と同じ石の下である。

村木の墓は彼自身で生前横浜の久保山につくったものがあつたともいわれたが、三年前、延島英一死去のとき、その家の墓地に在った村木の骨を、長芝家の鎌倉の墓地に改葬したのだ、ときいていた。

その碑の側面には、もつとも早く死んだ彼の名が一番遅れて刻まれ、「労働運動志士、」俗名村木源次郎、大正十四年一月二十四日」とはつきり読むことができた。